

国際日本研究センター

International Center for Japanese Studies

NEWSLETTER 東京外国語大学 April 2021 No. 28

国際日本研究センター第28号 目次

- ◆『外国語と日本語との対照言語学的研究』第31回研究会…1 ◆講演会&ワークショップ……………10
沖繩とポスト植民地主義文学——崎山多美と〈シマコトバ〉というバクダン
- ◆講演会「社会的実践としての批判的談話研究」……………4 ◆東アジア連続講座……………11
- ◆『外国語と日本語との対照言語学的研究』第32回研究会…7 ◆活動予定……………12

対照日本語部門主催『外国語と日本語との対照言語学的研究』第31回研究会

2020年12月12日(土) 14:00 ~ 17:50 オンライン(ZOOM)

山本恭裕氏(東京外国語大学:言語学、フィリピン諸語、パプア諸語) 嶋原耕一氏(東京外国語大学:日本語教育学、談話分析)の発表に続いて、森口恒一氏(静岡大学:言語学、フィリピン・台湾諸語)による講演が行われた。発表の概要は以下のとおりである。当日は60名近い参加者があり、質疑応答も活発に行われた。(対照日本語部門)

山本恭裕「アイク語の指標と結合価」

本発表ではパプア・ニューギニアのアイク語を対象に、動詞述語とその項である名詞句の関係が形態的にどのように表現されるかに関して記述を行っている。アイク語では動詞述語での指標(indexing; 拘束人称代名詞と呼ばれることも)により項の役割が示される。この点に関して、本発表の研究課題は次の2点にまとめられる。第一に、項の情報を示す動詞形態論の特徴はどのようなものか(配列パターンはどのタイプか、形態論のプロセスは分析的か、それとも融合的かなど)。第二に、指標要素の統語・意味的ステータスは何か。本発表の冒頭において、アイク語の系統や分布、言語的な基本事項について紹介している。アイク語はパプア・ニューギニア北西部のサンダウン州で話されるトリチェリ語族に属する言語である。トリチェリ語族は50ほどの言語を含む、この地域で最大の語族であるが、アイク語を含めその多くが未記述の言語である。アイク語話者はモナンディン地域の6つの村に分布する。全ての話者がトク・ピシンとの2言語使用を行っている。アイク語の他動詞節の基本語順はA-V-Pであり、ニューギニア地域に広く見られるA-P-Vとは異なっている。名詞的カテゴリーとして文法性(男性 vs. 女性)を持つほか、一部の名詞は単数・複数を区別する。

続いて、課題の1つ目に挙げられている動詞での項の指標(argument indexing)について記述している。アイク語の自動詞と他動詞は動詞での指標の数によって定義される。自

動詞は指標を1つ、他動詞は指標を2つ持つ。今のところ3つ以上の指標を持つ動詞は発見されていない。まず自動詞には主語項を指標する接頭辞が付加される。1人称、2人称、3人称および単数、複数が区別される。3人称単数において女性と男性の文法性が区別される。2人称複数と3人称複数ではシンクレティズムが見られる。これは、共起する名詞句や文脈から曖昧性を排除できる。自動詞に含まれるのは移動動詞などに加えて、意味的に他動性が高いと思われる動詞(e.g. 'clean', 'cut', 'put')も複数含まれる点がアイク語の特徴と言える。他動詞は主語に加えて目的語を指標する形態素を含む。他動詞主語(A)は自動詞主語(S)と同じく接頭辞で指標される。目的語の指標は主語を指標する接頭辞と同様の数、文法性、人称の区別を持つ。典型的には接尾辞で実現するが、語幹によって補充法を用いるものもそれなりに見られる点で、一貫して接頭辞で実現する主語の指標とは違いが見られる。上記の点から、この言語の配列パターンは主格・対格型と結論づけられる。

続いて二つ目の課題、指標要素の統語・意味的ステータスについて議論を行なっている。他の主要部標示型言語においては、指標を動詞の項として機能する代名詞とみなすものが一般的である。アイク語では名詞句の実現が義務的でなく指標でのみ必須項が表現されることも可能であることから、指標が項を充足しているという見方は妥当である。

一方で、代名詞か否かという点について、不定の名詞句であつても必ず指標すること、総称指示の解釈も可能なことから、これを先行詞を必ず持つ代名詞とはみなせないとい

うことを議論している。(山本恭裕)

嶋原耕一「日本語ディスカッションにおいて『二人で答えること』の会話分析」

近年国内の大学では、「国際共修」または「多文化共修」という名を冠する授業が新設されつつある。それらの授業では、「学生の文化的多様性は学習上の潜在的資源となる」(末松他、2019、p.4)という考えから、主に日本人学生と留学生とが相互に学び合うことを通して、異文化間能力(intercultural competency)を身につけることが期待されている。日本国内の国際共修教育はまだ手探りの段階であり、特にその方法論については、まだ確立されているとはいえない。発表では、国際共修教育の方法として採用されることのある、グループディスカッションを分析対象とし、特に参加者が「二人で答えること」をどのように達成しているのか記述することを試みた。

データとしたのは、研究者が2018年5月～7月に実施した、国際共修教育の模擬授業における、日本人学生と留学生の日本語ディスカッションである。各回の学生人数は16～17名であり、4～5名のグループを毎回4グループ作った。グループに分かれた後で研究者の指示により、自己紹介(10分)、ディスカッション①(20分)、ディスカッション②(20分)の計60分の活動に参加してもらった。ディスカッションでは「小学生がスマートフォンを持つことのメリットとデメリット」や「大学教育の問題点」などのテーマを、具体的な質問とともに提示した。データは全12グループ分であり、その長さは合計で約720分である。

発表では、三つのデータを提示し分析を進めた。そのうちの一つを、以下に引用する。トランスクリプションの作成には、Jefferson(2004)及びMondada(2019、version: 5.0.1)を参考とした。

断片1: AとCは留学生、BとDは日本人学生である。直前では韓国人留学生であるAが、韓国の高校生の教育事情について話している。

01 A: ↑あ:やっぱり塾と[か:]
 02 D: [あ:塾[か
 03 B: [あ::
 04 A: 塾行ってる人ほんと 多[いんです
 05 D: [あ:日本っぽいな
 06 C: °あ [も° *日*+本|も: 同じです[か=°その塾°
 07 B: [°u:
 08 D: [日本も:そう
 c 視 *B, *D-->>
 d 視 +C-->
 b 視 |D-->
 09 D: ⇒ 基本みんな +塾行く[|よ+ね| [大学<狙う 人は>
 10 B: [|n:: |そ[うですね
 d 視 +B--> +前方-->>
 b 身 |頷き
 b 視 |CとDの間-->

上記断片の、06行目に注目したい。留学生であるCが日本人学生BとDに順に視線を遣りながら、「日本も同じですか」という質問を産出している。それに対して、08-09行目でDが応答を産出している。ここでDは、応答の開始時には質問者Cに向けていた視線を、「基本みんな」の直後にBに遣っている。09行目でDは「塾行くよね」と確認要求発言を産出しているが、トランスクリプションを見ると、Bはその「よね」を聞く前に、「n::」とDの発言に確認を与えている。この確認付与は、Dの視線に相接していると考えられるだろう。そして確認が得られるや否や、DはBから視線を外して前に向き直り、「大学狙う人は」とターンを取り戻している。

研究者が持っているデータでは、他にも断片1のように、十分に言わんとすることが投射(project)された位置で、第三者に視線を遣り、確認を得るというプラクティスが観察された。参加者らはそのようなプラクティスを通じて、質問に対して「二人で答えること」を達成していると考えられる。

国際共修教育では、国籍に基づく文化に過剰な注目が集まりやすいがゆえにステレオタイプの構築を招きやすいことが、これまで報告されている。しかし参加者間で確認を取り合いながら、自身の所属する集団の「文化」を提示することは、そのようなステレオタイプを防ぐ戦略として記述できるだろう。今後も実践への応用を見据えて、より緻密な分析を進めていきたい。

参考文献

- Jefferson, Gail (2004), "Glossary of transcript symbols with an introduction", In Conversation Analysis: Studies from the First Generation (Gene H. Lerner, ed.), Amsterdam / Philadelphia, John Benjamins, pp.13-31
- Mondada, Lorenza Conventions for multimodal transcription <<https://www.lorenzamondada.net/multimodal-transcription>>
- 末松和子・秋庭裕子・米沢由香子(2019). 国際共修 文化的多様性を生かした授業実践へのアプローチ 東信堂

(嶋原耕一)

森口恒一『主題』『主語』の観点から見たフィリピン・台湾諸語と日本語の対照

人類は、生きて行くために食料調達という行動をしなければいけない。その際に重要な役をなす「採集」と獲物を狙う動物が持っている本能から獲得した「狩猟」を行わなければいけない。その時に重要な武器となる「注目」を発展させ、言語的なものに応用したものが、対格言語の文法における「語順トピック」、「フォーカス主題」、「主語」であろうと考えられる。一つの名詞句を文の中で順番を入れ替えて強調した「語順トピック」、文章の流れの中で「注目」した名詞句とその格構成に焦点を当てた「フォーカス主題」、単文を構成する中心的な役割を果たす動詞を形成する認知項目の一つに注目した「主語」という見方が出来る。

人間の感覚器官で感知されるのは、「存在」、「状態」、「移動」、「変化」、「停止」、「働きかけ」のようなものである。人は、それらの行動・変化に「注目」という行動を起こす。言い換えれば、不動のものには、「存在」、生きているものには、「状態」、生物には、「移動」と「変化」(なる)、そして、それらに対しての「働きかけ」(Action) (する) により「変化」させるということである。

ここでは、人類の重要な本能である「注目」に基づいた言語形式の一つとして「主語」「フォーカス主題」を中心に論じる。前者は、外界の出来事を文に作り上げる、動詞化する際に目に映るものへの「注目」が問題であり、後者は、文章の流れの中の「注目」が問題である。この原理が「対格言語」の支配している「原理」であろうと考えられる。しかし、その規則があてはまらない例を分析により以下のようなことが明らかになった。

1. 「主語」「フォーカス主題」は、対格言語である日本語でも、フィリピン・台湾諸語でも共通する同一の原理の上に成り立っている。違いは、操作規則が違うということである。

2. 1. の例外例を追求すると「能格性」「活格性」「心的表現」のような共通の基底の意味を持ち、それぞれの言語で別の規則が関係している事がわかった。日本語の例外を

分析すると、入れ子構造で基底の意味を説明し、それらに文法的な変化を起こさせて、関係の部分の消去して出来上がったものが、例外的な表現になると考えられる。

また、この入れ子構造の主節に来る動詞的なものは、「静態・動態」、「時間」、「心」、「現象」、「する・なる」、「状態」等の意味を発話に組み込んでいることがわかる。日本語では、それらを表現するために入れ子構造と「受動態」や「連続動詞」(Serial verb) を使う。

3. 一方、フィリピン・台湾諸語では、動詞としての変化がない擬似動詞(Pseudo verb)と状態を表現する ma- という特別な接辞を使う。ヨーロッパの言語では、動詞の特殊な形を作り出し使っている。また、他の言語では、「能格」や「活格」形式を使って表現しているようである。それらの意味の情動的、文化的、認知的な部分を消去して表現するために各種の類型的な手法をとっていると考えられる。

4. 日本語の場合は、入れ子構造で「心」の内容をも表現出来、その主節に「心」の部分を「受動態」と「連続動詞」で表現する。また、同じように「心」的な、「伝聞」的構造を入れ子構造で、主節に置き、後に消去して、動詞の形を変化させると考えればヨーロッパの動詞の接続法や活格形式も同じ形式であろうと考えられる。

この試論から結論出来ることは、言語を「能格言語」、「活格言語」、「対格言語」、又は、それらの混合・スプリットという方法で明確に分類するのではなく、それぞれの言語では、上記と同一の意味表現をあらわす手段を持ち、メインの形式とそれを補う形式を保持しているということである。対格言語では、それらは、破格的・例外的な「主語」「フォーカス表現」としてあらわれ、日本語では、それを受動態や連続動詞(Serial verb)で、フィリピン・台湾諸語では擬似動詞(Pseudo verb)・接辞で、ヨーロッパでは、活用形(活格構造)や接続法のような形式で表現しているようである。(森口恒一)

The 31st "Contrastive Study for Japanese and Other Languages," organized by the Contrastive Japanese Division, was held on Saturday, December 12th, 2020, from 2:00 to 5:50 p.m. via ZOOM.

Presentations by YAMAMOTO Kyosuke (Tokyo University of Foreign Studies; linguistics, Philippine and Papuan languages) and SHIMAHARA Koichi (Tokyo University of Foreign Studies; Japanese pedagogy, discourse analysis), were followed by a lecture by MORIGUCHI Tsunekazu (Shizuoka University; Linguistics, Philippine-Formosan languages).

"Indexing and Valency of the Aiku Language" YAMAMOTO Kyosuke

The Aiku language is spoken in the Sandaun Province in northwestern Papua New Guinea and belongs to the Torricelli language family. The Torricelli languages comprise the largest language family in the region with about 50 languages, many of which including Aiku are undescribed.

This presentation described how the relationship between a verbal predicate and its noun phrase arguments is morphologically expressed in the Aiku language in Papua New Guinea. In Aiku, the role of an argument is assigned by the indexes of the

verbal predicate. Aiku verbal morphology in terms of representing the information about arguments is characterized as follows: intransitive verbs have one index while transitive verbs have two, and transitive subjects (A) are indexed by prefixes, as is the case with intransitive subjects (S).

As for the syntactic and semantic status of the indexation, the index of an object has the same number, grammaticality, and person as the prefix indexing the subject. Though typically realized by a suffix, the object indexation is realized through suppletion for a certain number of stems, which marks the difference from the subject indexation that is constantly realized by a prefix. From above,

批判的談話研究とは権力の談話実践を分析し、権力による支配を可視化し、それを通して社会問題の解決に取り組み、時には提言を行うものである。名嶋氏がこれまでに扱ったテーマは、原発、放射能汚染、特定秘密保護法、安倍首相の戦後 70 年談話、憲法改定、安保法制、沖縄（辺野古、オスプレイ墜落、宜野湾市長選挙）、萌えキャラ（ジェンダー）、道德教育、オリンピック教育、主権者教育と幅広い。

批判的談話研究の究極の目的は「社会問題の解決」である。では、大学教員はそれにどう関わってゆけばよいのかという問いに対して、氏はサイード (1998) の言葉を引用し、「知識人とは公衆に向けてあるいは公衆になりかわってメッセージや思想を代弁し明晰に言語化できる人間である。自分の書いたものが社会の中で活字となった瞬間、人は、政治的生活に参加したことになる」と述べた。

研究の実践や学内の教育だけでなく、大学の外での講演やワークショップを実践、中高校生に向けた出前授業などによる民主的シティズンシップ教育を実践すること、また時にはデモ、署名、SNS による発信など直接的な実践も行っている。

名嶋氏ご自身の体験による必然性により批判的談話研究

野呂香代子（ベルリン自由大学）「民主的シティズンシップ教育と批判的談話研究」

野呂氏の講演は、ご自身の生い立ちからお話が始まった。日本において学生時代から大学に勤務時代に至るまで、自身の教育観やビジョンについて語る機会がなく窮屈な生活を送られていたが、ドイツに移住したことで、日本の社会的常識や規範から解放されたということである。

野呂氏は、『「正しさ」への問い』（2001）/2009、野呂香代子、山下仁編著、三元社）で Critical Discourse Analysis (CDA) を紹介されて以来、これまで数々の著書を発表され、言語使用の裏側にある差別、権力や社会について発信し、社会の規範に疑いの目を向ける重要性を訴え続けていらっしやる。

研究の具体例としてメルケル首相によるロックダウンに関する演説 (2020.03.18) を挙げられた。コロナウィルスがロックダウンという非常な事態を生む→コロナウィルスは非常に危険である→ロックダウンはコロナにより生まれた→コロナウィルスに対する治療法やワクチンがない→だからやるべきことはロックダウンであるという一連のロジックのもとに演説が行われ、コロナウィルス対策としてはロックダウン以外に選択肢がないことが前提となって演説が組み立てられている。しかし、その前提を疑うことが重要である。コロナウィルスはどの程度危険なのか、「感染」するとはどういう事態を指すのか、感染者数は何を基にどうやって数えられるのか、他の要因の死亡率との比較はどうか、ロックダウンは必然的に生じた事態だというのが、政府の意図や責任はどうか、と疑問を問いかけることにより、ロックダウンが薬剤やワクチンが開発されるまでの時

を進められるようになった経緯と社会との関りの実践についてのお話から、先生の強い動機と明確な理念が感じられた。

注) 批判的談話研究について、当初は批判的談話分析 (Critical Discourse Analysis) という表現が使われていたが、分析の手法だけではなく、姿勢として広く捉えられるようになったことから、近年は批判的談話研究 (Critical Discourse Studies) という表現が多く使われている。

(引用文献)

- ・テウン・A・ヴァン・デイク (2010) 「学際的な CDA—多様性を求めて」 ルート・ヴォダック、ミヒャエル・マイヤー編著、野呂香代子監訳 (2010) 『批判的談話分析入門——クリティカル・ディスコース・アナリシスの方法』三元社、00.133-165
- ・エドワード・W・サイード著、大橋洋一訳 (1998) 『知識人とは何か』平凡社

(谷口龍子)

間稼ぎでロックダウンの目的はワクチン開発である、といった事柄が見えてくることを示された。

次に野呂氏は、欧州評議会における民主的シティズンシップ教育について紹介された。欧州評議会では、20 年以上にわたり民主的シティズンシップ教育 / 人権教育に取り組んでいる。若者の政治離れ、民主主義への幻滅、移民問題、過激主義の台頭などから、加盟各国に、子供や若者に対する民主的シティズンシップ教育の重要性を強調している。ボイテルスバッハ・コンセンサス (1976、政治教育研究者たちが議論した地ボイテルスバッハにちなんでつけられた) による政治教育の基本原則は以下の内容をもつ。

- ① 圧倒の禁止：教員は生徒を圧倒し、生徒自身の判断の獲得を妨げるものであってはならない
- ② 異論の提示：学問や政治において論争のあるものは、授業においても論争のあるものとして扱う
- ③ 生徒の利害関心：生徒が自身の利害関心を分析する能力を養うようにする

この基本原則は野呂氏が所属している日本語教育の現場においても実践が行われている。

さらに、批判的談話研究は、社会を批判的に見つめ、人権が尊重され、自由が保障される社会の構築を目指すという点で、民主的シティズンシップ教育の一形式として捉えることができると述べた。

* * *

東日本大震災の体験から批判的談話研究の道にそれまでの研究の方向を大転換し、身をもって社会実践につなげて

対照日本語部門主催『外国語と日本語との対照言語学的研究』第32回研究会

2021年3月6日(土) 14:00 ~ 17:50 オンライン(ZOOM)

益子幸江氏(東京外国語大学:音声学)、黒澤直俊氏(東京外国語大学:ロマンス語学、ポルトガル語学)の発表に続いて、松本曜氏(国立国語研究所:意味論、認知言語学)による講演が行われた。発表の概要は以下のとおりである。当日は100名を超える研究者や学生が学内外から参加し、大変盛況な研究会となった。(対照日本語部門)

益子幸江「音声学の活かし方——音声教材と音声研究」

音声学の知識、あるいは音声学の研究の成果を、第二言語学習に活かすにはどのようにしたらよいだろうか。

教師は、音声学の知識を習得することで、学習者の発音を音声学的に観察し、適切な発音指導を行うことが可能になる。音声学の知識がない教師は、発音が誤っている、あるいはひずんでいるというのはわかって、その理由がわからないため、学習者に正しい発音に至る筋道を示せない。誤った発音の理由を探究するために音声の研究を行えば、その成果は学習者の発音指導にも活かすことができる。

ここで、学習者の音声指導(発音指導・聞き取り指導)の必要性和その時期とについて説明をしておこう。

言葉の意味の区別に用いられる音形で、言語学習の最初期に知らなければならないのは、分節音、つまり、母音や子音についてである。これらの区別を身につけなければ、その後の言語学習は覚束ない。

これとは対照的に、超分節的要素のイントネーションなどは、学習の初期には身につけられない。超分節的要素のうちで、アクセントは分節音と超分節的要素の両方に関わるが、言語によってアクセントの対立のあり方が異なるので、言語ごとのきちんとした研究が必要である。

分節音については、母音、子音のそれぞれについて、音素とその現れた音声について、学習者の母語と学習言語との間での対照研究を行い、その成果を応用すべきである。1つの音素は音環境などの条件によりさまざまな変異音で現

れるが、それらを把握しておくことで、有効な教材を作成することができる。

さらに、アクセントによって母音音素や子音音素に異音が生じることもある。これも音環境のひとつとみることもできるが、アクセントが超分節的要素であることを考えると、やはり分節音と超分節的要素とを簡単に二分することには無理があることがわかる。このあたりの事情は言語によってもかなり異なっている。

超分節的要素のイントネーションと強調の区別に関しては、イントネーションは句または文の単位にかかる音の高低のパターンであり、強調はそれらの単位にかかる「強めること」である。強調というのは「強められた」と聞き手が理解することであるが、言語によっては音の高低、各分節音の中のいずれかの長さ、などが手段として用いられるので、イントネーションと混同されることもある。あるいは逆に、イントネーションと捉えることも可能である。

イントネーションは文の単位にかかわるので、学習される文法によってパターンが増えることになる。イントネーションは言語によってその現れ方と表現される意味がかなり異なり、今後の研究に俟たなければならないことが多いが、日本語学習に限れば、イントネーションは強調だけでなく非強調の表現にも関わっている。これらは、学習の進行に従って適宜学ぶべきことである。

(益子幸江)

黒澤直俊「中世語の会話研究は可能か?『聖杯の探索』の中世ポルトガル語訳(13世紀)を用いて」

最近の研究では中世ポルトガル語から現代ポルトガル語への統語変化がいくつか指摘されている。例えば、ポルトガル語には人称不定詞と呼ばれる人称語尾のついた不定詞が存在するが、古い時代には使役構文など上位の動詞に支配される従属構造の中には現れなかったことや、接語人称代名詞について、古い時代には意味上結びついていない不定詞に接辞されることはなく、上位の従属を形成する動詞に接辞され、接語の移動や不定詞と上位動詞が単一の領域を形成していたことなどである。歴史文献学の分野に生成統語論の手法を応用した、このような研究はリスボン大学のAna Maria Martinsなどが主導しているといっていよいが、言語資料を広く細かく見ると例外も存在していて、もう少し踏み込んだ検討が要請されてもいる。アメリカのラテン語・

イタリア語研究者のErnst Pulgramの一般向けに書かれた概説で、ローマ時代の民衆語を知る手段として、発話を直接写した箇所の研究の必要性が主張されている。Plautusの戯曲やPetroniusとApuleiusの小説の会話の直接引用部分を研究することで話し言葉のラテン語の実際に迫れるのではないかという。発表者は、これをポルトガル語の通時研究に応用できないかと以前から考えていたが、QDAソフトを用い、中世語の会話部分の分析を試みることにした。まだパイロット的な段階、あるいはそれ以前のお試しレベルではあるものの、今後につなげるための手ごたえ程度は感じられたと思う。今回は市販のMAXQDAを用い、以下のことを行った。

ポルトガル語で残っている散文の物語として最古のもの

として「聖杯物語群」に属する『聖杯の物語』（ポルトガル語では『アリマタヤの書』と呼ばれる）と『聖杯の探索』がある。いずれも古仏語からの翻訳であることがわかっているが、『聖杯の探索』（ただし、これは古仏語の『聖杯の探索』と『アーサー王の死』に対応する）を取り上げ、直接話法による会話部分を取り出して分析することにした。この物語は1240年前後に古仏語から古ポルトガル語に訳され、15世紀第2四半期の作成が推定される写本、ウィーン国立図書館のms.2594として伝承されている。本文に関する研究も多く、写本もマイクロフィルムで容易に参照できる利点がある。テキストには13世紀から15世紀までの言語特徴が重層的に存在し、写本の伝承過程が推測されるが、会話の多くは直接話法で描写されているので、該当する部分に「誰が誰に対して」というコードを階層的につけていった。他に、テーマ別の「語り」や「間接話法」、個別の言語学的な関心に応じたコードを振り、テキスト全体の分析も将来的には可能な形にした。

この発表では、テキストの前半、全体の5分の1程度にあたる部分に現れる直接会話を分析したが、そのうち、指示代名詞の直示的用法が注意を引いた。ポルトガル語の指示詞の伝統的な体系は3系列の *este...*, *esse...*, *aquele...* で、直示的に用いられるとき1人称、2人称、3人称に対応するとされ、近称、中称、遠称の指示代名詞である。歴史文法書でも説明は同じで、部分的に形態的なヴァリエーションはあるものの、現代ポルトガル語と本質的に変わらないとされる。60年代の構造主義的な研究では、近称の指示代名詞は指示対象として1人称と2人称の双方に近いものをさす場合と1人称に近いもののみをさす場合の両義性があることが指

摘されているが、テキストの会話部分には *Senhor, quem é este cavalleiro que ora fezeistes?* 「あの、今あなた様が叙任した『この(?)』騎士は誰ですか?」というのがあり、この会話が起る場面の状況からは *este cavalleiro* がさす対象はむしろ2人称にのみ関わって近い対象で、ポルトガル語の用法から見ると不自然に見えた。意味的に中称の代名詞として使われていると考えられた。そこで、テキスト全体に現れる指示代名詞の生起数を調べたところ、数値の小さな誤差はあり得るが、*este...*(1063), *esse...*(44), *aquele...*(568) で、中称の代名詞が極端に少ないのではないかと思われた。もちろん、直示的にのみ用いられるわけではなく照応的にも使われるので、頻度が必ずしも決め手になるわけではないが、ラテン語の6つの *is* 「(照応的) その」、*idem* 「同じ(種類)」、*ipse* 「同じ(対象)」、*hic* 「この」、*iste* 「その」、*ille* 「あの」がロマンス語に至る変化過程で、ラテン語の中称の *iste* がポルトガル語の近称の *este* に至る変化が進んでいなかったためではないかと最初は考えた。ところが、このテキストの翻訳のものの古仏語は *cist* と *cil* の近称と遠称の2対立で、かつ、すでにかかなりの混乱が見られる段階だったので、最終的には古仏語の原文との対照しないとわからないという結論に至った。

指示詞に関してはやや破綻したような結論になってしまったが、待遇法や接語代名詞の位置など多少の手ごたえも感じられる領域もあり、今後の展開を期待している。古仏語原文との対照についてはかなり前に部分的に試みたことがあるが、この角度からの考察がかなり有益ではないかと考えている。(黒澤直俊)

松本曜「諸言語における移動経路の表現：共通性と差異」

本講演では、松本先生が統括をする移動表現の類型論に関する国際的なプロジェクトの紹介がなされた。移動表現は現在、類型論の分野において多くの研究者が興味を持っている現象であり、移動という偏在的な事象に関するさまざまな要素がどのように言語表現に反映されるかの研究が盛んにおこなわれている。移動表現の類型的な研究については、伝統的には、経路を(主)動詞で表す動詞枠づけ言語と、経路を動詞の付随要素で表す付随要素枠づけ言語の対立で考えられてきた(Talmy 1991, 2000)。一方、松本先生の先行研究においては、経路主要部表示型と経路主要部外表示型という分類を用いた類型化が行われている。

松本先生が統括する国立国語研究所のプロジェクトでは、諸言語の移動表現に見られる差異と共通性を明らかにするために、通言語的に統一的な実験調査が行われている。特に、直示性がどのように言語化されるかという点と、言語内における変異に注目した調査が行われている。方法論については、短いビデオクリップを見せた後、各言語の母語話

者に内容を描写させるという実証的な方法を採用する。これによって、各言語が持つ移動表現の言語化の方法が統一的に分析できるようになっている。

国立国語研究所ではおもに3種類の研究が行われ、実験Aでは経路表現に関する、様態・経路・直示の3つのファクターがどのように言語されるかの調査、実験Bではおもに直示に関する詳細な調査、実験Cでは経路の言語化に関する詳細な調査が行われている。その中でも本講演では実験AとCの紹介が主になされた。

実験Aでは、3x3のビデオフリップを用いて、様態、経路、直示の3つのファクターがどの要素によって言語化されるかを類型論的に考察している。その結果、様々な言語は経路が主要部外のみで表される言語と、経路が主要部と主要部外の両者によって表される言語に大別できることが確認された。また、言語の中には、直示表現が含まれる場合と含まれない場合で、経路がどの要素によって実現されるかが異なる言語があることも確認された。

次に実験Cでは、経路の種類によってどの言語表現で表されるかの傾向が異なる点かについての調査がなされている。結果として、方向系の経路や境界を超える経路については主動詞で、非終結的な経路については名詞不可要素で表現されやすいという一般的な傾向があることが確認された。

講演後には、中国語、タイ語、日本語、ロシア語の専門家から類型論的な傾向に関する質問がなされ、有意義な議論が行われた。本講演では、研究者や学生が参加をした大型のプロジェクトの一端に触れる貴重な機会となった。
(大谷直輝)

The 32nd “Contrastive Study for Japanese and Other Languages,” organized by the Contrastive Japanese Division, was held on Saturday, March 6th, 2020, from 2:00 to 5:50 p.m. via ZOOM.

Presentations by MASUKO Yukie (Tokyo University of Foreign Studies: Phonetics) and KUROSAWA Naotoshi (Tokyo University of Foreign Studies: Romance languages, Portuguese) were followed by a lecture by MATSUMOTO Yo (National Institute for Japanese Language and Linguistics: Semantics, Cognitive Linguistics).

**“Phonetics in Practice - Audio Materials and Phonetic Research”
MASUKO Yukie**

How can the phonetic knowledge or the results of phonetic research be applied to second language acquisition?

With phonetic knowledge, teachers can observe learners' pronunciation from the phonetic point of view and provide appropriate pronunciation instruction.

Among the sound units that distinguish the meaning of words, segments or vowels and consonants are the core knowledge that must be learned at the beginning of language learning. Without being able to distinguish these sounds, the rest of the learning process will be a struggle.

In comparison, suprasegmental factors, such as intonation, cannot be acquired in the early stage of learning. Among the suprasegmental factors, accent is related to both segmental and suprasegmental factors, and the nature of accent opposition varies from language to language; therefore, each language requires independent research.

For segments, a contrastive study should be carried out on phonemes and corresponding speech sounds of both vowels and consonants in the learner's first language and the target language. Such research should be applied to SLA accordingly.

As for the suprasegmental factors, the difference between intonation and stress is that intonation is the pattern of the rise and fall of the voice over a phrase or sentence, while stress is the emphasis in such units. Although stress is what listeners interpret as an emphasis, it can be realized by pitch,

segment length, or other factors in some languages and is sometimes confused with intonation. Or, conversely, it can be regarded as intonation.

Since intonation is related to sentence units, the number of intonation patterns increases with the grammar being learned. As far as Japanese learning is concerned, intonation is related to emphatic as well as non-emphatic expressions. These things should be taught in accordance with the student's learning stage. (MASUKO Yukie)

**“Possibilities of Conversation Analysis of Medieval Languages – with Medieval Portuguese Translation of ‘Quest for the Holy Grail’(13th Century)”
KUROSAWA Naotoshi**

Recent studies have pointed out several syntactic changes that occurred between medieval Portuguese and modern Portuguese. For example, in old Portuguese, personal infinitives or infinitives with a personal ending did not appear in subordinate clauses dominated by a higher verb, such as in causative structures. Furthermore, clitic personal pronouns were affixed not to semantically connected infinitives but to a higher verb forming the subordination, and the movement of affix, infinitive, and higher verb formed a single domain. In his introduction written for a general audience, Ernst Pulgram, an American linguist specialized in Latin and Italic languages, argues for the necessity of studying direct speech transcriptions to understand folk languages in the Roman era. He suggests that spoken Latin can be elucidated by studying the direct quotations of conversations in Plautus' plays and novels by Petronius and Apuleius.

To apply this method to the diachronic study of Portuguese, the speaker analyzed conversations in medieval languages using MAXQDA, a commercially available QDA software. The study subject is the direct speech in the conversational part of “Quest for the Holy Grail,” the oldest remaining prose story in Portuguese.

This presentation analyzed the direct speech in the first half of the text, which is about one-fifth of the entire text. What caught the attention of the presenter was the deictic use of demonstrative nouns. The traditional system of Portuguese demonstra-

tives constitutes a tripartite distinction of *este...*, *esse...*, *aquele...*, which respectively correspond to the first, second, and third person in deictic use and are proximal, medial, and distal demonstratives. Structuralist research in the 1960s pointed out that a proximal demonstrative pronoun either refers to objects close to both the speaker and the addressee, or objects close only to the speaker. However, this does not necessarily apply to the following utterance in the text: “*Senhor, quem é este cavalleiro que ora fezestes* (Sir, who is ‘this (?)’ knight that you just anointed)?” “*Este cavalleiro*” in this context refers to an object close only to the addressee. This seems unnatural and was therefore thought to be used as a medial pronoun. However, when the presenter examined the numbers of occurrences of each type of demonstrative pronouns in the whole text, it was revealed that medial pronouns are extremely few: *este* (1063), *esse* (44), *aquele* (568).

At first, this seemed to be because, while *este* has deictic and anaphoric functions, the six Latin demonstratives, is “(anaphoric) that,” *idem* “the same (kind),” *ipse* “the same (object),” *hic* “this,” *iste* “that,” and *ille* “that,” were in the process of being transformed and incorporated into Romance languages; and the Latin medial demonstrative *iste* had not yet fully turned into the Portuguese proximal *este*. However, the Old French text, which the Portuguese translation is based on, consists of two opposing series of demonstrative pronouns, *cist* and *cil*, and exhibits much confusion. Therefore, the presenter concluded that it is necessary to contrast the Portuguese translation and the Old French text to further the analysis. (KUROSAWA Naotoshi)

**“Motion-Path Descriptions across Languages: Commonalities and Differences”
MATSUMOTO Yo**

This lecture introduced the international project on the typology of motion event descriptions supervised by MATSUMOTO. In the traditional motion event typologies, languages are categorized into two opposing types: verb-framed and satellite-framed languages according to whether the Path appears in the main verb or in the satellite (Talmy 1991, 2000). In contrast, MATSUMOTO's

research used a classification based on the coding location of Path: the head Path coding and the head external Path coding.

Under the supervision of MATSUMOTO, the National Institute for Japanese Language and Linguistics (NINJAL) has conducted an experimental cross-linguistic study to clarify the differences and commonalities in motion event descriptions in various languages. The project features a video-based empirical method in which native speakers of the target languages are asked to produce descriptions of short video stimuli after watching them.

In this NINJAL project, three types of research are conducted: Experiment A is designed to investigate how three factors, Manner, Path, and Deixis, are coded in motion path expressions; Experiment B focuses on Deixis; and Experiment C is a detailed investigation of path expressions. The lecture mainly focused on Experiments A and C.

Experiment A uses 3x3 video clips to typologically examine which of the three factors of Manner, Path, and Deixis is expressed by which elements.

The results confirm that languages can be broadly categorized in terms of whether Path of motion is coded only in head external positions or both head and head-external positions. This experiment also validates that in some languages, Path is realized by a different element depending on whether Deixis is included or not.

Experiment C focuses on the variations of linguistic methods applied to express different types of Path. The results show that there is a general tendency for directional and boundary-crossing Paths to be encoded by the main verb, and for non-terminal paths by non-noun elements.

After the lecture, a meaningful discussion took place on typological trends with the audience. (OTANI Naoki)

More than 100 researchers and students from inside and outside the university attended the lecture, making it a very successful event. (Contrastive Japanese Division)

東京外国語大学国際日本研究センター 対照言語学部門主催
『外国語と日本語との対照言語学的研究』
第32回 研究会
2021年3月6日(土) 14:00～17:50
ZOOMにて(一般公開、お申し込み必要)

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆ PROGRAM ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
14:00～15:00
発表: 益子 幸江氏 (東京外国語大学: 音声学)
「音声学の活かし方 一音声教材と音声研究」

15:10～16:10
発表: 黒澤 直俊氏 (東京外国語大学: ロマンズ語学、ポルトガル語学)
「中世語の会話研究は可能か?」
「聖杯の探案」の中世ポルトガル語訳 (13世紀) を用いて

16:20～17:50
講演: 松本 曜氏 (国立国語研究所: 意味論、認知言語学)
「諸言語における移動経路の表現: 共通性と差異」
各言語の語彙は、人や物の移動をどのように表現するのだろうか。その表現/ターンには興味深い共通性と差異がある。この講演では、国立国語研究所の対照言語学プロジェクトにおいて行われてきたビデオ実験の結果に基づいて、その共通性と差異を考察する。具体的に考察するのは、移動経路の表し方である。UP, DOWN, INTO, OUT, TO, FROM, ACROSS, ALONGなどの経路の表現にどのような傾向があるかを考察し、今まで行われてきた移動表現の類型論を再考する。また、複数の経路場面を含むルートの表現についても比較を行う。東京外国語大学において行われた研究にも触れる。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆ 事前申し込み方法 ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
以下のリンク先またはQRコードより事前申し込みをお願いいたします。
<https://forms.gle/PaB5WvU7TAdv9> 締め切り: 3月5日(金) 16時まで
事前申し込みをされた方に、講演会の前日(3月5日)、ZOOMリンクと案内を送信する予定です。

対照言語学 各口 益子 幸江氏 大城 貞俊氏 黒澤 直俊氏 三宅 豊之 山田 洋平 幸松 実
お問い合わせ先 (国際日本研究センター) tel: 042-330-5794 mail: info-icjs@tufs.ac.jp

東京外国語大学 国際日本研究センター主催 講演会&ワークショップ 「沖縄とポスト植民地主義文学——崎山多美と〈シマコトバ〉というバクダン」

2021年1月26日～29日にかけて、表記の企画が開催された。これは大学院国際日本学研究院のJapan Studies 冬期集中講義としても開講された。講師は崎山多美氏を加えて9人のラインナップとなった。豪華なベストメンバーとなったと考える。この集中講義では、昨年にひきつづき植民地主義と戦後東アジアの冷戦体制を扱いつつ、崎山多美という、沖縄文学の最先端を疾走してきた作家を中心とした集中講義+ワークショップということもあり、参加者は毎回50名に達した。また、報告集も現在準備中である。日程・講師・テーマを以下にかかげておく。内容はつぎのようなものであった。

全体の基調をなすテーマは「継続する植民地主義」であり、これについてはまず共同研究の成果をふまえた沖縄の思想史と戦後史研究の提起(中野敏男氏)、続いて戦後沖縄文学史の紹介と論点の提起(大城貞俊氏)、クレオール文学からみた崎山多美論(中村隆之氏)、引き揚げ文学・脱植民地化とホロコースト研究との交差(ニコラス・ランブレクト氏)、そして文化人類学を参照した崎山文学のテキスト読み(真島一郎氏)、ラテンアメリカ研究からの提起(高木佳奈氏)、崎山文学とサバルタン・スタディーズとの交差(友常勉)、しめくくりは社会言語学の視点から、ドイツと日本の状況を参照した慰安婦問題のポリティクスの解釈(野呂香代子氏)。

最終日のワークショップでは、崎山氏からそれぞれの報告へのレスポンスと、自著改題、そして『月や、あらん』

の一部が、日本語をくいやぶるシマコトバの試みの一例として、朗読された。討議では沖縄文学のみならず、沖縄をめぐる言説や言語実践にいたるまではばひろいテーマが論じられ、高い批評精神にみちた崎山氏の文学営為を理解するまたとない機会となった。これまでの東アジア連続講演会の一環でもあるこの企画は、今後の共同研究のための一里でもある。この内容をこれから発展させていきたい。最後に、この場を借りて崎山多美氏および講師のみなさまに心から感謝申し上げたい。(友常勉)

国際日本研究センター 東京外国語大学 国際日本研究センター主催
講演会&ワークショップ
日程: 2021年1月26日(火)～1月29日(金)
ZOOMにてオンライン開催 (一般公開、事前申し込み必要)

★プログラム★ (敬称省略)

10:10～11:40 中野敏男 (東京外国語大学名誉教授)
「継続する植民地主義と沖縄」
12:40～14:10 中野敏男 (東京外国語大学名誉教授)
「継続する植民地主義と沖縄」
14:20～15:50 大城貞俊 (作家、元琉球大学教授)
「沖縄戦後小説史 1 四人の方言作家と沖縄文学の特質」
16:00～17:30 大城貞俊 (作家、元琉球大学教授)
「沖縄戦後小説史 2 多様な文学・多様な作家たち」

10:10～11:40 中村隆之 (早稲田大学)
「崎山多美のシマ文学への思い: 沖縄/カリブ海伝説と比較文学的視点から」
12:40～14:10 中村隆之 (早稲田大学)
「崎山多美のシマ文学への思い: 沖縄/カリブ海伝説と比較文学的視点から」
14:20～15:50 ニコラス・ランブレクト (大阪大学)
「引き揚げ文学と戦後日本の脱植民地化」
16:00～17:30 高木佳奈 (早稲田大学)
「ラテンアメリカにおけるポストコロニアル文学と移民」

10:10～11:40 友常勉 (東京外国語大学)
「もっと(シマコトバ)を サバルタン・スタディーズとunlearnの挑戦」
16:00～17:30 野呂香代子 (ベルリン自由大学)
「慰安婦と沖縄」

10:10～11:40 友常勉 (東京外国語大学)
「もっと(シマコトバ)を サバルタン・スタディーズとunlearnの挑戦」

ワークショップ: 1月29日(金) 12:40から
「沖縄とポスト植民地主義文学——崎山多美と〈シマコトバ〉というバクダン」
基調講演: 崎山多美「シマコトバ」と私の「小説言語」の来歴」
コメント: 中野敏男、大城貞俊、中村隆之

お申し込み先: info-icjs@tufs.ac.jpにて1月25日正午まで受け付けます。申し込み先の方に、1月25日にZOOMリンクを送信します。
なお、この講演会をワークショップは「東アジア連続講演会 Japan Studies」にて開催されています。
お問い合わせ先 (国際日本研究センター) Tel: 042-330-5794 E-mail: info-icjs@tufs.ac.jp

【1月26日】

中野敏男（東京外国語大学名誉教授）

「継続する植民地主義と沖縄Ⅰ」

「継続する植民地主義と沖縄Ⅱ」

大城貞俊（作家、元琉球大学教授）

「沖縄戦後小説Ⅰ——四人の芥川賞作家と沖縄文学の特質」

「沖縄戦後小説Ⅱ——多様な文学・多様な作家たち」

【1月27日】

中村隆之（早稲田大学）

「崎山多美のシマ文学への誘い：」

沖縄／カリブ海仏領との比較文学的視座からⅠ」

「崎山多美のシマ文学への誘い：」

沖縄／カリブ海仏領との比較文学的視座からⅡ」

ニコラス・ランブレクト（大阪大学）

「引揚げ文学と戦後日本の脱植民地化」

【1月28日】

真島一郎（東京外国語大学）

「まつろわぬ声／さえぎれぬ絆—アフリカとポストコロニアル文学」

高木佳奈（日本学術振興会特別研究員）

「ラテンアメリカにおけるポストコロニアル文学と移民」

友常勉（東京外国語大学）

「もっと〈シマコトバ〉を——サバルタン・スタディーズと
unlearnの実践Ⅰ」

野呂香代子（ベルリン自由大学）

「慰安婦像と沖縄」

【1月29日】

友常勉（東京外国語大学）

「もっと〈シマコトバ〉を——サバルタン・スタディーズと
unlearnの実践Ⅱ」

1月29日（金）12:40～ ワークショップ「沖縄とポスト植民地主義文学——崎山多美と〈シマコトバ〉というバクダン」

基調講演 崎山多美『『シマコトバ』と私の『小説言語』の来歴』 コメンテーター 中野敏男、大城貞俊、中村隆之

比較日本文化部門主催 東アジア連続講座

韓国現代史を中心に、「4・3事件」「光州事件」を中心に学んできた第4回までの取り組みに対して、第5回から第10回までは、「女性国際戦犯法廷」をはさんで、沖縄の現在を課題にして学んできた。2000年の国際女性戦犯法廷の舞台裏とその後の「従軍慰安婦問題」の経過が詳細にたどられた第5回の金富子報告と、第10回のHONG Yunshin（一橋大学）報告での沖縄における「慰安所」をめぐる研究状況と言説環境の批判的検討は、「従軍慰安婦」研究の現水準を確認するものであったし、第8回の呉世宗報告は「沖縄と朝鮮人」へと論点を拡大し、「東アジアのなかの沖縄」の戦争と暴力を焦点化するものであった。同

様の視点が、第7回の三上智恵監督においては、沖縄スパイ戦と沖縄のなかで問われる戦争責任として論じられた。沖縄研究の現水準を表現するものとしては、崎山多美の文学をあつかうことができた第6回のビクトリア・ヤング氏の報告と、沖縄青年労働者の移動に焦点をあてた第9回の上原こずえ報告がある。テーマと講師の人選およびコメンテーターの選択においても、これ以上ないバリエーションと質を実現することができた。またオーディエンスも、毎回50名前後を超える参加を得た。これを踏まえて、2021年度も継続していきたいと考える。

第5回 日時：2020年10月28日（水）

上映：『沈黙の歴史をやぶって 女性国際戦犯法廷の記録』

（『女性国際戦犯法廷』国際実行委員会、VAWW-
NET ジャパン）

解説：金富子（東京外国語大学）

報告：金富子、中野敏男（東京外国語大学名誉教授）

第6回 2020年11月27日（金）

講演：「過去のカチャーシー：「沖縄文学」と脱植民地
化問題をめぐって」

講師：Vicky YOUNG（ケンブリッジ大学）

コメンテーター：村上陽子（沖縄国際大学）

第7回 2020年12月1日（火）

講演：「語られなかった沖縄戦 被害の視点と加害の視点」

講師：三上智恵（映画監督）

第8回 2021年1月22日

講演：「沖縄の朝鮮人の歴史から見えること」

講師：呉世宗（琉球大学）

第9回 日時：2021年2月17日（水）

講演：「棄民に抗し、サブシステムを求め一移動する
沖縄青年労働者の反差別・反開発闘争」

講師：上原こずえ（東京外国語大学）

コメンテーター：友常勉（東京外国語大学）

第10回 2021年3月25日

講演：「恨（ハン）とチムグリサ：沖縄における「慰安所」
という状況」

講師：HONG Yunshin（一橋大学）

コメンテーター：謝花直美（沖縄タイムス）

林慶花（韓国・中央大学）

East Asia Lecture Series organized by the Comparative Japanese Culture Division

After the first four lectures on contemporary Korean history dealing with the Jeju April 3 Incident and the Gwangju Incident, the fifth to tenth lectures were on the current situation in Okinawa following “the Women’s International War Crimes Tribunal.” We achieved an unparalleled variety and quality in the selection of themes, lecturers, and commentators. The themes covered in this series included: the behind-the-scenes of the 2000 Women’s International War Crimes Tribunal and the subsequent developments of Japan’s military sexual slavery or

the “comfort women” issue; the research situation and discourse environment surrounding “the military sex slave camps” in Okinawa; the war and violence in “Okinawa in East Asia;” the literature of SAKIYAMA Tami; and Okinawan young workers’ labor migration. Each lecture had an audience of over 50 people.

In this intensive lecture series, we continued from last year to deal with colonialism and the cold war system in post-war East Asia. The lectures and workshops centered on SAKIYAMA Tami, a writer who has been at the very forefront of Okinawan literature, and each lecture attracted over 50 participants.

ipants.

In the final workshop, SAKIYAMA responded to each of the reports, gave an overview of her own works, and read a part of “Tsuki ya, aran” as an example of attempts at Shima-kotoba (island speech) as a language to eat its way through the standard Japanese language. The discussion covered a wide range of topics, not only Okinawan literature but also the discourse and linguistic practices surrounding Okinawa, providing a unique opportunity to understand the literary activities of SAKIYAMA, who is with a highly critical mind.

国際日本研究センター主催「夏季セミナー2021」・「サマースクール研究発表会」のご案内

夏季セミナー 2021

『COVID-19 下の人文学の現在』

日程：2021 年 7 月 20 日（火）～ 23 日（金）

ZOOM 開催（予定）

7 月 20 日（火）

- * 11:00 – 11:20 開会式およびセンター長あいさつ
友常勉「国際日本研究センターの歩み」（仮）
- * 11:20 – 12:50 基調講演
ユンホスク（韓国・サイバー韓国外国語大学）
司会：鈴木美加
- * セクション 1：オンラインによる日本語教育とコミュニケーション
司会：鈴木美加・谷口龍子
- 13:40 – 14:30 Nadezhda Weinberg（ロシア・イルクーツク大学）
- 14:40 – 15:30 Tasanee Methapisit（タイ・タマサート大学）
- 15:40 – 16:30 幸松英恵（東京外国語大学）
- 16:40 – 17:30 林慧君（台湾・台湾大学）
- 17:40 – 18:30 オクサーナ・アサドチフ（ウクライナ・キエフ国立大学）

7 月 22 日（木）

- * セクション 2：COVID-19 と文学研究
司会：友常勉
- 9:00 – 9:50 Lim Beng Choo（シンガポール・シンガポール大学）
- 10:00 – 10:50 鄭家瑜（台湾・政治大学）
- 11:00 – 11:50 土田耕督（東京外国語大学）
- * 13:00 – 14:00 特別講演
朴喆熙（韓国・ソウル大学）
- 14:10 – 15:00 特別講演
坂本恵（日本大学）
司会：友常勉、谷口龍子

7 月 23 日（金）

- * セクション 3：サステナブル人文学のために
司会：久野量一、友常勉
- 9:00 – 9:50 小那覇セシリア（アルゼンチン・ラプラタ国立大学）
- 10:00 – 10:50 孫建軍（中国・北京大学）
- 11:00 – 11:50 キタハラ 高野 聡美（ブラジル・リオデジャネイロ州立大学）
- 13:00 – 13:50 Scarlett Cornelissen（南アフリカ・ステレンボッシュ大学）
- 14:00 – 14:50 Stanislaw MEYER（ポーランド・ヤギェロン大学）
- * 15:00 – 16:30 特別講演
野本京子（東京外国語大学名誉教授）
司会：川村大
- * 学長のご挨拶
- * 閉会式

夏季セミナー 2021 開催期間中、下記の日時で、大学院生を中心とする研究交流の場として「サマースクール研究発表会」の開催を予定しています（※発表者の募集は終了しています）。

- ・ 7 月 21 日（水）09:00 – 14:00
- ・ 7 月 22 日（木）15:00 – 18:00

「夏季セミナー 2021」および「サマースクール研究発表会」の詳細なスケジュールは、決定次第ウェブサイトに掲載いたします。そのほか最新のイベントや刊行物についての情報も随時更新しております。QRコードからもアクセスできます。

発行：東京外国語大学国際日本研究センター

〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1 アオラグローバル 2F

TEL 042-330-5794 Email info-icjs@tufs.ac.jp

ウェブサイト URL <http://www.tufs.ac.jp/icjs/>

